カトリック教報

カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852－8113
長崎市上野町10－34
カトリックセンター内
TEL 095－843－3869
FAX 095－843－3417
振替口座 01880－5－2699

発行人
大水文隆

印刷所
株式会社 藤木博英社
〒850－0852
長崎市万屋町5－13
TEL 095－821－2146
FAX 095－821－2148

年頭教書

あなたはほんとうにキリストを信じていますか

―教区シノドスの提言を受けて―

大司教 ヨセフ 高見 三明

教区のすべての皆様お一人お一人に、新年のごあいさつを申し上げます。皆様と共に昨年のお恵みを神に感謝すると同時に、公私にわたって祈りと支援と協力をしてくださった皆様に感謝を申し上げます。この一年も神のお恵みとしていただき、それに応えながら、皆さんと共に永遠の幸いに向かって歩んで行きたいと思います。特に今年は、日本の信徒発見150周年、高山右近殉教400周年、原爆70周年など節目に当たっています。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、日本の信徒発見150周年を意義深く記念するために、第1回長崎大司教区代表者会議（シノドス）が、3年の準備を経て昨年大司教館で4期にわたって開催、3つの大きな提言が採択されて、わたしに手渡されました。協議が進むにつれて、教会から遠ざかっている信者たちのことが主要な課題として浮上し、それを軸にまとめた、「キリストの真の共同体を築くために――司教・司祭・修道者・信徒の回心と霊的刷新」「祈りと信仰教育の再興」「癒やしの福音を携えた共同体と私」という提言の大枠と細部が採決されました。

しかし、これらの提言が実行される前提条件として、信者一人一人が静かに自分と向き合い、自分自身の信仰を問い直す必要があるように思います。

1 神は、すべてのもの、そしてあなたのからだと魂をつくってくださった

わたしたちは、天地万物の創造主を信じています。高木仙右衛門は最初に捕らえられたとき、役人に対してこう断言しました。「私どもはキリシタンです。天地万物がなかったときから天主があって、天地万物をつくり、最初の人間をつくりました。天主はわれらのまことの御親でございます。この御親のほかには、何も信じて敬うことはできません」

造られたものの中に格別な愛を受けたわたしたちがいます。母親は子どもを宿して生みますが、母親が子どもに霊といのちを恵むのでもなく、一人一人の肢体を組み合わせるのでもありません。世界の造り主が人の出生をつかさどり、あらゆるものにいのちを与えるのです（Ⅱマカバイ7・22～23参照）。詩編作者は、神様がこのちっぽけなわたしを心にかけてくださる、このわたしは何者なのでしょうか、と語りかけています（詩編8・4～5参照）。

わたしたちは、ほかの人々とのきずなの中で、神から与えられた知恵と力を用いて生活しています（申命記8・12～18参照）が、人となられた神の子イエスによって、すべての罪をゆるされ、神様との間に親と子のきずなをつくっていただきました。この恵みは、洗礼によってキリストの受難と死と復活にあずかる永遠のいのちのことです。このようにわたしたちが持っているものはすべていただいたものです。それを認めるなら、いただかなかったかのような顔をして高ぶってはなりません（Ⅰコリント4・7参照）。財産を積んでも、全世界を儲けても、自分のいのちを失ったら何の得もありません。あなたは自分のいのちをどんな代価で買い戻すことができますか（ルカ12・16～20、マタイ16・26）？

2 神はいつもあなたと共におられるだけでなく、あなたを担っておられる

神と人、人と人が「共にいる」こと、これが愛であり、いのちなのです。神は最初から人間と共におられます。それは、「園の中を歩く」（創世記3・8）と素朴に表現されています。神はアブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、ヨシュア、モーセ、ダビデ、結局神の民と共におられました。しかし彼らは共にいなかったのです。そのため、神が見える姿でわたしたちと共にいることになりました。そこで、永遠から父である神と共におられる独り子が人間となられました。「インマヌエル」（「神は我々と共におられる」の意）とも呼ばれ、イエス（「主は救う」の意）と名づけられました（マタイ1・21、23参照）。結局、イエスは、教えとわざ、つまりそのご生涯、特に受難と死と復活を通して、わたしたちと共にいて、わたしたちを救う神として現れたのです。そして天に昇られるとき「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ28・20）と約束されました。使徒たちもパウロもそのことをすぐに体験していきました。

神があなたと共におられるということは、あなたを担うことでもあります。神ご自身こう言われます。「あなたたちは生まれた時から負われ、胎を出た時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで、白髪になるまで、背負って行こう。わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す」（イザヤ46・3～4）。詩編作者も、「主をたたえよ、日々、わたしたちを担い、救われる神を」（詩編68・20）と歌っています。イスラエルの民が約束の地にたどり着くまでの荒れ野でも、旅の間中も、神は父が子を背負うように背負ってくださいました（申命記1・31、イザヤ63・9参照）。イザヤ書の「主の僕」はさらにわたしたちの病を担い、痛みを背負い、多くの人の罪を自ら負い、彼らが正しい者とされるために自らをなげうち、死にます（イザヤ53・4～12参照）。この僕は、イエス・キリストの予表です。キリストは「十字架を通して」つまり「御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し」、対立するすべてのものを「一つの体」すなわち教会として神と和解させました（エフェソ2・14～17参照）。

3 あなたは、キリストを信じることに喜びを感じていますか？

神は、あなたのすべてを知っておられ、あなたを導き、支えてくださっています（詩編139・1～3、8～10参照）。あなたに対する神の計らいは、浜の砂粒より多く、その果てを極めたと思っても、あなたは依然神の中にいるのです（詩編139・17～18参照）。あなた自身は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、もはやあなた自身のものではないのです。あなたは、金や銀のような朽ち果てる物によってではなく、キリストの尊い御血によって買い戻されたのです。だから、あなたのことばと行い、あなたのすべてで神の栄光を現すように努めなければなりません（Ⅰコリント6・19～20、Ⅰペトロ1・18～21参照）。あなたは、これほどの愛と恵みをいただいているのです。賛美と感謝と喜びを感じないわけがありません。でもわたしたちの喜びは、「喜びに満ちあふれるイエスの心の泉からわき出てきます」（教皇フランシスコ）。

信仰や教会はあなたにとってどんな意味がありますか？　もしあなたが真剣にキリストを信じるなら、教会がキリストの「からだ」、つまりわたしたち信者であるということを受け入れるはずです。わたしたちは、頭であるキリストと、また互いに切っても切れないきずなで結ばれています。実際、聖書を読むとき、あるいは聖書朗読を聴くとき、キリストがあなたに語りかけています。ミサ（感謝の祭儀）に参加するとき、キリストご自身をいただきます。キリストがあなたに触れ、あなたもキリストに触れているのです。重い皮膚病の人が、キリストに触れられたとき癒やされ、出血症に苦しんでいた女性がイエスの服の房に触れたとき癒やされたように、あなたも癒やされます。しかし、ほんとうの癒やしは、あなたが真心からイエスを神の子救い主として信じ、彼に生涯を委ね、その教えと生き方に従ってひたすら自分を神とほかの人たちのために差し出すようになるときです。

「奉献生活の年」開年ミサ

昨年の11月22日（土）カトリック長崎大司教区は、「奉献生活の年」の開年を記念するミサを浦上教会で行い、奉献生活者をはじめ信者約200人が祈りをささげた。

教皇庁奉献・使徒的生活会省は当初、奉献生活者のための特別年を2014年11月21日～15年11月21日と提案していたが、教皇フランシスコのスケジュールを考慮し、14年11月30日（待降節第1）～16年2月2日（主の奉献）に変更した。

髙見三明大司教は「奉献生活者は、教会と社会にとってキリストを証しする力となっています。このことを神様からのお恵みとして共に感謝したいと思います。洗礼も最初の奉献であり、私たちは神様に奉献されて聖なるものとされていますが、彼らはさらにその上に、教会のため世界のために特別な方法で自分をささげようとしています。この年を奉献生活をおくる人たちだけでなく、司祭・信徒も有意義なものとなるように共に祈りましょう」と説教した。

ミサに参加した木口直恵修道女（お告げのマリア修道会）は、「いつの世でも奉献生活者はキリストに似た者となるよう招かれています。開年ミサの中で、霊的、社会的、人間的に成熟した修道者、奉献生活者となることができるよう、多くの人々の協力を受けて成長したいと心から念じ、特別年の一歩を踏み出しました。ミサの恵みをいただいたことに感謝いたします」と語っていた。

2015年は第2バチカン公会議『修道生活の刷新・適応に関する教令』公布50周年にあたる。

婦人会から女性部へ

2005～6年に発足した小教区・地区・教区の評議会には各婦人会会長が代表して参加してきましたが、13年5月の教区連合婦人会総会は、今後「評議会女性部」として活動することを決議しました。「婦人会」は原則「既婚者の会」でしたが、「女性部」は未婚や独身の女性も会員としますので、女性の参加の幅が広くなり、「参加する教会」をさらに一歩前進させます。また、日本カトリック団体連盟（日カ連）に加盟（1993年）したことは、日本および世界と連携しながら、会員の信仰を深め、教会と社会において女性の尊厳認識の促進と、その使命遂行に寄与することにつながりますから、大変有意義です。なお日カ連は、世界カトリック女性団体連盟（世カ連＝1910年創立、教皇庁公認団体）の要請で、1974年女性団体の全国組織として創立され、世カ連に正式加盟、また日本カトリック司教協議会の公認団体です。

（大司教　髙見三明）

ほしかげ

皆さん、昨年はお疲れさまでした。特に、忙しい中、時間を割いて教区シノドスや教会奉仕に参加した方々のいたわり合いも広がっています。イエスさまもいたわる教会を見せています。「使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。イエスは、『さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい』と言われた」（マルコ6・30～31）。ありがたい一言。次また頑張ろうと後押ししてくれる一言を、イエスさまから始めてくださいました▲教会前の道路は、朝夕毎日長い渋滞が起こります。ある朝、すれ違う車に驚きました。歯磨きしながら運転している人を見たからです。仕事に急ぐ人たち、子どもの送迎に忙しいパパやママ。時間に追われる日々、誰もが抱えている基本的問題を考える暇などないようです▲「創造についてのカテケージスは極めて重要です。これは人間として、またキリスト者としての生活の根底にかかわっています。つまり、『わたしたちはどこから来たのか』『どこに行くのか』『わたしたちの起源は』『わたしたちの目的は』……という、あらゆる時の人々が提起する基本的な問題に対して、キリスト者の信仰に基づく回答を明確にするものだからです」（カテキズム282）▲「わたしの基本的な行き先」を、忙しいからこそ祈れたらと思います。（S・N）

信徒発見150周年と高山右近列福に向けて
これだけのことは知ってほしい⑪

さあ、お呼びだ

―出向いて来た家族の肖像―

教区法務代理　古巣　馨

レプトン銅貨2枚の救い

小春日和に誘われて、店頭に並ぶ不揃いのリンゴを眺めていました。「リンゴはキズのあるのが甘いよ。」顔見知りの婆さんが耳打ちして行きました。キズものは見かけも悪くきらわれるけど、キズついたリンゴはそれを必死でかばおうと糖分を多く出し無キズのリンゴよりうまくなると、市場の主人が婆さんの自説を補ってくれました。うれしくなって、ついザルふた山を買って帰りました。これまで出会った味わい深い家族の肖像と重なったからです。

一瞬が永遠とつながっていることを教わったのは、喪服を着た老婆からでした。叙階2年前、召命に見切りをつけようと帰省した時です。早朝のミサの後、「わたしらは神様以外に何も頼るものがありません。きつかでしょうが、司祭になってわたしらの相手をしてください」と言うと、喪服を着た老婆は私のポケットに何かをねじ込み、手を合わせて私を拝みました。前日、不慮の死を遂げた息子の葬儀を出したばかりの老いた母親でした。ポケットの中には、4つ折りの500円札がちり紙に包まれていました。あの時、老婆のレプトン銅貨2枚の人生（ルカ21・1～4）を分けてもらい、救われました。夫に先立たれ、病気や事故で次々と子どもを見送り、爪に火をともすように家庭を守りながらそれでも人を気遣う。あの瞬間、永遠なるお方の前に立たされた思いでした。救いは脳にではなく心に宿るものだとはじめて知りました。

思えば、分けてもらったものでいつも生かされてきました。分けてくれたのは、障害を抱えた子どもを持つ家庭、生活保護を受けている家庭、離婚している家庭……いくつもの傷を刻みながら、「ただで与える」（マタイ10・8）不思議な豊かさを持っている家庭でした。

教区シノドスと世界司教シノドス

「時は神からの使者だ」と言ったのは、イエズス会の創立者の一人福者ピエール・ファーヴルです。神のみわざは歴史の中で起こされてきました。今年3月17日、日本の教会は信徒発見150周年を迎えます。また、2月3日に没後400年を迎えるユスト高山右近は列福承認を間近に控えています。〝ワレラノムネ　アナタノムネト　オナジ〟を受け渡してきた日本の教会の霊脈の中で、そのオナジの霊性がまとめられた時代の入口に右近が、250年後、名乗りを上げた潜伏キリシタンはその出口にいた人たちです。今年差し出される2つの記念は、オナジという信仰の霊脈を日本と長崎の教会が今また生き直すことが目的です。

高見大司教様は神からの使者に応えるべく、この教区が抱える多くの課題と行く末に希望の道筋をつけようと、教区シノドスを開催しました。教区シノドスは昨年11月3日に第4会期を終え、提言案をまとめました。その中で、教区シノドスは長崎教区のうめきにも似た祈りを代弁しています。

「親の葬儀に参列する子どもたちが、祈りも唱えられず、ミサの与り方も知らず、おろおろとしている光景を見るにつけ、あれほど信仰を伝えて生きることにこだわり続けてきた長崎の教会が、枯渇し、疲弊していくのを痛感します。わたしたちはこの会議で、教区シノドスが開かれる根本的な理由を確認することができました。それは、長崎の教会がここにきて信仰を伝えることができなくなったことを素直に認め、また多くの兄弟姉妹がなぜ教会から遠ざかってしまったのか、ゆるしを請いながらその原因を尋ねることです」（『提言案』2）。長崎の教会が家庭の中で、小教区で信仰を伝えきれなくなったという危機感から始まったのが今回の教区シノドスです。

時を同じくして、バチカンでも昨年10月5～19日まで世界代表司教会議（シノドス）第3回臨時総会が開かれました。テーマは「福音宣教の観点から見た家庭の司牧的課題」です。「今、キリスト者の家庭が抱える問題の所在をはっきりとさせ、家庭の福音を信頼のおける仕方で伝え、生きるために」何とかしなければいけないと、総会の準備文書は危機感をもって全世界の司教に通達しています。「多くの子どもや若者が、両親が秘跡を受けることを目にすることもないという事実を思い起こせば、この状況から生じる宣教の問題がどれほど切迫しているかがわかります」とも追記しています。フランシスコ教皇は事あるごとに、家庭が抱える課題の中で「離婚者と再婚者の司牧的・秘跡的な配慮」に本気で取り組みたいと胸中を明かしています。それは、多くの仲間が教会から遠ざかり、また遠ざけられている原因は、癒やしの福音を携えているはずの教会がその働きを怠ってしまっているという自責の念があるからです。家庭の問題は癒やしと深くかかわっているのです。神からの使者はローマの教会と長崎の教会に同じ課題を提示し、その答えを求めて呼び出されました。

もろ刃の剣のなかで

3組に1組の夫婦が破綻する時代に入りました。カトリック信者の夫婦も例外ではありません。その破綻のきっかけの一つに、異宗婚によってはじまった結婚生活があります。異宗婚は夫婦の絆をキリストと教会の絆にまで高めてくれる聖なる恵みの場であり、非キリスト者の配偶者と授かった子どもが一緒に受洗する「家族洗礼」という一番身近な宣教の場でもあります。しかし一方では、宗教による価値観の違いは、徐々に夫婦の亀裂を生み破綻へと向かうこともあります。異宗婚は信仰と生活の危機を招くのか、それとも新しい枝として教会という幹に接木されていのちに漲（みなぎ）るのか、もろ刃の剣です。その分岐点には、異宗婚によって誕生した家庭を取り巻く司牧者と小教区共同体があるのです。

いろんな行き違いや不和や裏切りを、意地や根性や気合いだけで乗り越えられるものではありません。成らないものは、どうしても成らないのです。だから多くの場合、身も心も壊れたあげく離婚に至ります。さらに、「離婚したら教会には行けなくなる」という誤った教えと理解が、離婚者に教会の門を閉ざしてしまいます。長崎の教会はこれから出向かなければなりません。出向くとは、「足を止める、他者に目を注ぎ耳を傾けるために心配事を脇に置く、道端に倒れたままにされた人に寄り添うために急用を断念する」（『福音の喜び』46）ことです。そんな出向いて来た人たちを何度も目の当たりにしてきました。

さあ、お呼びだ

「難しいとは思いますが、何とか相談に乗ってやってくませんか。毎週主日のミサに来て、一番後ろに座って、聖体拝領のころになると黙って帰るんです。涙ぐんでいると思います。」羊の臭いを染み込ませた牧者は、萎えた羊の傷みをわが身の痛みに換えて訴えてきます。聖霊に背中を押されて教会の門を叩こうとするとき、冷たく閉ざされた門に出くわすことのないように「父の家」の門をいつも開けていようとする牧者の姿は癒やしそのものです。

「この子が教会にも秘跡にも与れん姿を見たら、死ぬにも死にきれません。何とか成らんもんでしょうか。」本意でもないわが子を後ろに、何度も何度もお辞儀しながら頼み込む親の切なる思いは、昔も今も冷酷な裁判官の心を動かし、閉ざされた門を開きます（ルカ18・1～8）。「秘跡の門は、いかなる理由があっても閉ざされるべきではありません。これはとくに『門』である洗礼の秘跡についていえます。聖体は秘跡の頂点ですが、完璧な人のための褒美ではなく、弱い者のための良質な薬であり栄養です」（『福音の喜び』47）。親は弱ったわが子のために、その大切さを本能的に知っているのです。

「悪かとはこいつです。でも、無理は承知のうえで、何とかしてやりたいと思って来てみました。話を聞いてやってくれませんか。」後先考えず、屋根をはがし寝台ごと病人をつり降ろす兄弟や仲間（マルコ2・4）が今もいるのです。その思いを知っただけで、すでに病人は癒やされているはずです。作り話ではありません。すべて教会の結婚裁判所の門をくぐるために、出向いて来た家族の肖像です。生きていくことは切なく、生きていくことは愛おしいものです。傷を持った神が傷を生きる人に触れたとき、人は言うのです。「わたしの主、わたしの神よ」（ヨハネ20・28）。

出向いて来た家族の肖像は、盲人バルティマイのところに使いに出された人々（マルコ10・49）にそっくりです。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ」（マルコ10・49）。これから出向いて行く長崎の教会の姿がここにあります。

謹賀新年

大司教　高見　三明(42)

長崎大司教区

原塚　正人(64)　諫　早　市
佐藤　哲夫(58)　大司教館
川添　猛(54)　大司教館
下川　英利(54)　諫　早　市
山内　豊(54)　平　戸　市
山内　清海(53)　お告げ本部
下村　徹(52)　大司教館
村中　司(52)　長　与
峰　徳美(52)　大　浦
三村　誠一(51)　大　山
平野　勇(51)　鹿　子　前
野下　千年(51)　センター
堤　好治(51)　佐賀・呼子
宮川　俊行(51)　幼きイエズス修道会司祭館
小島　栄(50)　浦　上
萩原　劭(48)　焼　尾
阿野　武仁(48)　丸　尾
川上　忠秋(47)　深　堀
片岡　久司(47)　大司教館
川口　清(46)　五　島　市
浜崎　靖彦(46)　神　崎
長谷　功(46)　長　崎　市
橋本　勲(45)　上　神　崎
山川　忠(45)　センター
下口　勲(42)　福江・浜脇・井持浦
大山　繁(41)　黒　崎
松下　光男(39)　水　主　町
小瀬良　明(39)　佐　々
村川　昌彦(38)　大　崎
山内　実(37)　真手ノ浦
諸岡　清美(37)　大浦天主堂司祭館
岩村　知彦(33)　田　平
鳥山　邦夫(33)　鯛　之　浦
古巣　馨(33)　大司教館
橋口　朝光(32)　青　方
山脇　守(32)　長崎コレジオ
山田　聡(31)　平　戸
中村　満(30)　滑　石
岩崎　康彦(30)　青砂ヶ浦
川内　和則(29)　飽　ノ　浦
久志利　津男(29)　中　町
高野　治(29)　宝　亀
下山　盛朗(28)　平　戸　口
鳥瀬　文武(28)　水　ノ　浦
牧山　強美(26)　大神学院
中村　倫明(26)　三　浦　町
福島　光明(25)　山　田
眞浦　健吾(25)　小神学院
中濱　敬司(25)　浦　上
紙﨑　新一(24)　植　松
白浜　満(24)　大神学院
平本　義和(24)　天　神
葛嶋　秀信(24)　相　浦
中濱　繁喜(24)　大　曽
鍋内　正志(23)　八　幡　町
山村　憲一(23)　福岡コレジオ
岩崎　晋吾(22)　浦　頭
下窄　英知(22)　センター
中田　輝次(22)　浜　串
湯浅　俊治(20)　大神学院
浅田　照明(20)　西　木　場
大水　文隆(20)　三　ツ　山
辻原　達也(19)　奈　留
川原　拓也(19)　褥　崎
松田　聡史(18)　桐
山本　一郎(17)　長崎コレジオ
嘉松　宏樹(17)　中央協議会
中島　誠志(17)　大　野
山田　良秋(16)　島　原
川口　昭人(16)　神　ノ　島
一ノ瀬輝幸(16)　熊本・水俣
岡　秋美(16)　馬　込
熊川　幸徳(15)　イタリア
大瀬良直人(15)　黒　島
竹内　英次(14)　福岡・糸島
岩本　繁幸(13)　センター
尾髙　修一(13)　紐　差
川原　昭如(13)　大司教館
葛島　輝義(12)　福江・浜脇
鶴崎　秀晃(12)　木　鉢
工藤　伸也(12)　土井ノ浦
竹谷　誠(11)　三井楽・貝津
前田　達也(11)　稲佐代行
本田　靖彦(11)　仲　知
岩下　和樹(9)　小神学院
山口竜太郎(9)　出　津
鶴巻　健二(9)　木　鉢
汐留　義和(8)　太　田　尾
熊谷　裕司(8)　俵　町
谷脇誠一郎(7)　小神学院
山添　克明(6)　曽　根
野濱　達也(6)　早　岐
岩下　裕志(5)　浅　子
中尾　直通(4)　イタリア
大水　満(2)　滑　石
中野健一郎(1)　浦　上
川端　志範(新)　〃

修道会など

●イエズス会
アギラール・J・ホセ(55)　二十六聖人修道院
松村　信也(21)　立山修道院
デ・ルカ・レンゾ(18)　二十六聖人記念館

●コンベンツアル
聖フランシスコ修道会
末吉　矢作(60)　東　長　崎
中島　優(59)　聖フランシスコ園
濵田　盛雄(55)　湯江修道院
ビンセント・ラチェンダロ(51)　聖母の騎士修道院
萩原栄三郎(50)　小長井修道院
柳本　繁春(50)　本　河　内
山内　春治(50)　湯江修道院
瀧　憲志(49)　聖母の騎士修道院
谷村　達郎(41)　聖コルベ志願院
松田清四朗(40)　湯　江
西田　正(39)　東　長　崎
山下　公輝(36)　小長井修道院
赤尾　満治(21)　聖母の騎士修道院
平　孝之(19)　修　練　院
西本　仁史(16)　小長井修道院

●聖アウグスチノ修道会
モーリス・マホニー(54)　城　山
マイケル・ヒルデン(41)　〃
チャーリー・バヌエボ・ポムセノ(4)　〃

●レデンプトール会
頭島　光(27)　宮　宕
橋口　啓悟(18)　〃

●フランシスコ会
片岡　哲夫(62)　長崎修道院
冷水　義美(62)　〃
片岡　仁志(52)　〃
戸村　悦夫(46)　本　原
関口　七郎(38)　長崎修道院
江夏　国彦(35)　本　原
若林　智樹(19)　長崎修道院
パサラ・ジョゼフ(4)　〃
ブー・カイン・トゥオン(3)　〃
聖ルドヴィコ神学院

●神言修道会
川上　進(44)　長崎修道院
濵口　末明(35)　〃
聖ルドヴィコ神学院
ジェブーラ・エウゲニウス(27)　西　町
大川　好洋(24)　長崎修道院
松本　勝男(23)　〃
ヴァルガス・オスヴァルド(16)　西　町

●マリア会
山崎　善彦(45)　海星学園
池田　紀行(44)　海星修道院
末吉　克久(32)　小ヶ倉共同体
松本　幸徳(27)　海星学園
髙田　裕和(22)　小ヶ倉

●サレジオ修道会
ブリ・ヤン(33)　愛　野
ソボン・タデウス(29)　イエスのカリタス牧野修道院
古木眞理一(27)　時　津

●韓国殉教福者聖職修道会
金　桐旭(4)　中　町

●オプス・デイ
尾崎　明夫(29)　長　崎
木村　昌平(11)　〃
硲　恵介(1)　〃

●鹿児島教区
田邉　徹(63)　恵　の　丘

（　）内は叙階年数

NCK信仰養成講座

教区カテキスタ会設立の契機に

昨年11月23～24日カトリックセンターホールにおいて、NCK（日本カテキスタ会）の信仰養成講座が、初めて長崎で開催され、他教区からも含めて約160人が参加した。教区信仰養成部の協賛。テーマは第2バチカン公会議公文書を学ぶシリーズとして、『教会憲章』が取り上げられた。

始めに大山きよ子会長があいさつに立ち、1969年に神言修道会のゲオルグ・ゲマインダ師によって創設されたNCKが、日本司教団の認可・教皇庁公認の団体となった経緯を説明した。

初日の第1講話は、NCKの顧問司教である高見三明大司教（写真）が、第1章「教会の神秘」と第2章「神の民」について、「教会とは建物を指すだけではなく、同じ信仰を持つ人々の集まり、共同体を指す」と説明した。また「今回の公開講座が教区カテキスタ会の設立につながることを強く願っている」（本紙10月号1面参照）とし、参加者への協力を求めた。

第2講話は、仙台教区の佐々木 博師が第3章「教会の位階的構成、とくに司教職について」を解説した。「位階制度としては、神の民として歩むとき指導者が必要であるが、権威者としてではなく、仕える立場へと変えられた。司教は教え、統治するなどの任務のほか、司教団として団体的指導体制を形成している」

2日目は、フランシスコ会神学院の小西広志師が第4章「信徒について」の講話を行った。「信徒は、自分たちに依らなければ教会が地の塩となりえない場所と環境において、教会を存続させ活動的なものとするように招かれている」と紹介した。「信徒が使徒職を行う際は、これまでは聖職者への協力という形であったが、これからは独自性を発揮すべきである」

NCKでは、来年も第5章以下について継続して講座を開催したいとしている。

平戸ザビエル祭

神の愛を知り、生き、伝えよう

「ザビエルと共に 社会と共に」をテーマに、11月30日（日）午後2時から平戸文化センターで平戸ザビエル祭記念ミサが行われた。

同実行委員会では4年ごとに、平戸ザビエル記念教会から文化センターに会場を移してより盛大に開催することにしているが、今回はその第1回。地区信徒の関わりのもと部会を立ち上げ、1年ほど前から準備を重ねてきた。部会の提案によるプレ講演、各小教区での啓発、広く門戸を開いた招きなどを行い、巡礼団を含む1200人余の参加者を得た。時折強く降る雨の中、教会ごとにたすきをつなぐ徒歩巡礼が行われ、平戸を歩いたザビエルの思いを共有した。

大浦教会信徒有志による朗読劇『ああ、サンタ・マリアさま』に引き続いてささげられたミサの中で、高見三明大司教は宣教について語り、神に派遣されたザビエルのように「神の愛を知り、生き、伝えるように」と諭した。

準備に携わった信徒の一人は、「皆の協力のおかげで大きな盛り上がりを得ることができました。得たものをどう生かし、継続し、宣教へとつなげていくかがこれからの課題です」と話した。

聖母の騎士女子誓願式

マリアに倣い喜んで出て行こう

11月21日（金）けがれなき聖母の騎士聖フランシスコ修道女会本部修道院（諫早市）において、高見三明大司教司式による初誓願・終生誓願式とミサが執り行われた。

高見大司教は説教の中で、11月21日は聖マリアの奉献の日であり、また50年前に『教会憲章』が公布された日でもあることに触れ、マリアに倣い喜んで出て行くよう招いた。「伝承によると、マリア様は神殿に奉献されるとき、両親の方を振り返ることもなく、喜びに溢れて神殿の階段を駆け上がって行かれました」

誓願宣立者たちを見守った修道女の一人は、式の感想を次のように語った。「大司教様は、フランシスコ教皇様がよく使われるキーワード『喜び』『出て行く』についてお話しくださり、私たちの意識を、間もなく始まる奉献生活の年の思いへと導いてくださいました。この日は、天の花婿聖主（みあるじ）イエス様とけがれなき聖母に心からの感謝と賛美をささげる喜びの一日となりました」

初誓願宣立者
ヒルデガルト・マリア
仙波智美（高松・松山）

終生誓願宣立者
ジェンマ・マリア
金子真澄（長崎・浦上）

援助物資と献金を寄付

召命を支える信徒の犠牲

11月23日（日）10時半頃、平戸地区評議会の代表者らが長崎カトリック神学院を訪れ、神学生・志願生のための援助物資と寄付金を届けた。これは同地区の各小教区が呼び掛け集めたもので、毎年、米や野菜、日用品などの物資を贈っている。今回が41回目。神学生たちの食事のお世話をしているシスターは、「感謝しています。神学生皆、おいしいお米を喜んでいただいています」と話していた。神学院のほか、長崎コレジオ、大司教館、カトリックセンター、純心聖母会とお告げのマリア修道会の志願院にも贈られた。

また同日17時、長崎教区評議会女性部の深堀茂子代表と各地区女性部代表者らが指導司祭大山繁師と共に大司教館を訪れ、神学生養成援助金739万3547円を高見三明大司教に渡した。この献金は1977年に長崎地区連合婦人会によって始められ、その後、教区連合婦人会（現在の教区評議会女性部）発足に伴い、教区レベルの活動として引き継がれている。深堀代表は、「今後も皆様に協力をお願いし、神学生養成援助のための活動を続けていきたい」と話している。

連載・教区シノドスから恵みの年へ（終）

教区の刷新に向かって

はじめに

2014年11月3日午後、シノドス最終会議である第4会期を終え、感謝のミサの中で高見三明大司教に「長崎大司教区シノドス最終提言案」が渡された。10年にシノドス開催が決定されてから5年目のことになる。

5年前、大司教が教区シノドス開催を決定したときに、シノドスが教区にどんな効果を与えるのか期待した人がどれほどいたのだろうか。ある教区でかつてシノドスが開かれた。それから10年ほど経過するが、その後どのような成果が現れたのかほとんど知られていない。さらに遡ってナイスⅠ（1987年）・Ⅱ（93年）についても同様だった。しかし、そのような状況にあっても、大司教はじめシノドス開催に同意した司祭評議会は、シノドスの準備を進めていくうちにシノドスについて次第に理解が深まり、教区刷新への機運も高まっていくことを期待していたし、誰かに何とかしてほしいとの願いも込められていたようであった。

シノドスを始めるにあたって

教区シノドス開催が決定して後、早速準備が開始された。しかし、シノドスについての共通理解がなければ、教区の善のためになるはずのものが、教区の分裂の原因ともなりかねないのである。経費がかかり、相当な労力を費やして逆に大きな問題をかかえることになっては、開催の意味がない。そのために専門家の中には当初シノドス開催を危ぶむ声もあった。その上、信徒へのアンケートを実施したものの、以後遅々として準備が進まないことに、いつしか誰からともなく声が上がってきた。「教区は本気で教区刷新を実行しようとの覚悟があるのか」と。やはりシノドスもイベントで終わり、前と変わらないのではないかとの思いが声となって表れたのであるが、この声には長崎教区に何とか頑張ってほしいとの切なる思いが込められていたのも確かであった。

シノドスに関わる人たち

シノドス開催を前にして、既に終了したと思っていた信徒さえいたし、シノドスは司牧者と役員だけが関わることだと思われていたふしもあり、シノドス議員の意識との隔たりを感じた。そこには、議員選出に際し役職中心の選び方をしたことで、将来の教会を担う若い司祭・修道者・信徒を増やせなかったことに原因があったであろう。さらに広報を十分生かしきれなかったために、シノドス会期中に信徒の盛り上がりに欠けたことは否めなかった。こうした失敗を生かし、これからシノドス提言を実行していく段階にあって、教区民が一人でも多く力を合わせシノドス提言の実行に関わってもらいたいと念願する。そうでなければ、意味のなかったシノドスと化してしまいそうである。これからが正念場であり教区の本気が問われる。

シノドスの陰で

シノドス会期中、小教区や修道会でも祈りが捧げられていた。長崎教区には祈る伝統がある。確かに祈る人が少なくなったといわれているが、それでもみなさんの祈りは今回のシノドスを支え、分裂や対立から救ってくれた。シノドスの前後、また会期中の意見の相違から混乱が生じようとしていたとき、聖霊が働いてくれたのだと感じたが、それはみなさんの祈りのお陰であったことは間違いなかった。そして、ついに最終提言案を作成したのである。

「参加し、交わり、宣教する教会づくり」を目指して、長崎教区は『父の家に帰ろう――神のいつくしみを共に生き、伝えるために』をモットーに、これからいよいよ本気で教区刷新を始めようとしている。そのためにこれからも祈る人の存在は欠かせない。

教区シノドス中央委員会
委員長 山脇 守

お知らせ

〈教区家庭特別委員会〉
昨年11月、委員会の活動の目的や役割、信徒の生活に関する情報などを紹介するホームページを開設した。「カトリック長崎大司教区リンク集」で検索。

ぐるぐる園

▼一日マリアポリ　1月18日(日)10時45分～16時（10時受付）、深堀教会信徒会館。テーマ「お互いの愛」。問合先・フォコラーレセンター。TEL095-849-3812

▼召命祈願ミサ　1月23日(金)19時、大浦天主堂。

▼日本二十六聖人殉教記念ミサ　2月1日(日)14時、西坂公園（雨天時は中町教会）。

▼映画「うまれる」上映会　2月8日(日)11時・14時（2回上映）カトリックセンター。入場無料。教区家庭特別委員会、青少年委員会主催。

▼コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会一日黙想会へのお招き「福音の喜び」～日常をイエスと共に～　2月11日(水)9時30分～16時、北九州市・仙水町修道院。講師・片柳弘史師（イエズス会）。会費1500円（昼食代込み）。申込先・Sr.東城（1月31日締め切り）。TEL093-871-1166

▼世界平和の日メッセージ&神父さんとともに歌うコンサート　2月11日(水)14時、カトリックセンターホール。教区平和推進委員会主催。問合先・同委員会　吉村。TEL095-845-0117

感謝

―寄付―

長崎コレジオ
長崎カトリック神学院
●平戸地区信徒一同様
（援助物資とご芳志）

右の方からご寄付を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

大槌ベースボランティア募集

教区評議会は大槌ベースキャンプへのボランティアを引き続き募集し、協力を呼び掛けている。

●2月12日(木)～18日(水)（1／28締切）
●3月13日(金)～19日(木)（2／25締切）
●4月9日(木)～15日(水)（3／25締切）

申し込みは所属小教区へ。問い合わせは教区本部事務局（松尾）まで。
TEL 095-842-4450
FAX 095-842-4460

死者の月に祈る

天上と地上の教会の交わりを

昨年11月23日（日）11時、教区主催の追悼ミサが高見三明大司教主司式により浦上教会で行われ、信者らが共に祈った。

教区のすべての司教・司祭・助祭・修道者・信徒、恩人のために祈るこの追悼ミサは2009年に始まり、これまでは死者の月（11月）第1日曜日の午後、浦上教会で大司教司式のもと行われてきたが、今回は第1日曜日が教区シノドスの開催日と重なり、この日の実施となった。

大司教は説教の中で、典礼暦は私たちの最期の時を思い起こすよう作られていることを話し、また、「肉体上の死がすべてではなく、より深刻な死は互いの関わりがなくなることであり、神様との絆を失うことである。人との絆・つながりの土台は、神様を愛し、信頼すること。神様は私たちを救おうとし、いつも私たちを待っておられる」と語った。そして、「〝死〟は永遠のいのちへつながる門のようなもので、通過点である。私たちは生きるにも死ぬにも神様の御手の中にある」と諭し、「亡くなった多くの方々のためにあらためて永遠の安息を祈り、彼らが私たちのためにも祈ってくださることを願い、天上の教会と地上の教会の霊的な交わりをいつも心に留めて信仰生活を送っていこう」と呼び掛けた。

死者の月の始め、11月3日には聖職者のための追悼ミサも行われ、長崎市高尾町にある赤城聖職者墓地に大司教・司祭・修道者・信徒らが集まり祈りをささげた。

《追悼》本島 等さん

10月31日に肺炎のため亡くなった、元長崎市長の本島 等さん（享年92）。各紙で、「核廃絶の志 最後まで90歳超え座り込み」「被爆地・長崎の象徴 自身の戦争責任も直視」「平和の道 問い続け信念 終生揺るがず 鋭利な思想と庶民性」などの見出しで報じられた。

本紙1981年8月号。長崎市長だった当時執筆した原稿には、その年の2月にヨハネ・パウロ2世が平和の巡礼者として来日したことについて触れ、次の一文が記されていた。一部抜粋。「（今年の原爆の日に）私は平和宣言を言わねばならないが、これまでの心細さは全くなくなり、……全世界の多くの人々に素直に受け入れられることを確信して宣言を読み上げることができる」

市長引退後も日本の加害責任を問うと同時に、平和と正義を「人間が果たすべき使命」（2012年8月号『人』）と捉え、行動し、訴え続けた。

12月14日、高見三明大司教を実行委員長とする追悼ミサが中町教会で行われ、多くの人々が故人をしのんだ。

シンポジウム
津和野殉教者の列聖をめざして
～日本の信徒発見150周年～

日時　2015年3月8日（日）16時
場所　カトリックセンター
シンポジスト
高見三明大司教（長崎）、前田万葉大司教（大阪）、平林冬樹神父、その他

シンポジウムのご案内

2013年5月3日、前田万葉広島司教（現・大阪大司教）は、「2023年の広島教区創立100周年に向けて、津和野乙女峠の殉教者の列聖・列福を目指す」と宣言した。

広島教区はこの取り組みを周知させ広く協力を求めるために、広島と長崎でシンポジウムを計画している。信徒発見から浦上四番崩れ、浦上信徒総流罪から信仰の自由獲得へと至る日本の教会の歩みを振り返りながら、現代に生きる私たちが信仰の糧を発見する機会としたい。長崎での開催は右記の通り。

広島教区列聖委員会は、殉教者の出身地である長崎の方々に多く参加していただきたいと呼び掛けている。

みことばにふれて 113
中野健一郎神父（浦上教会）

「ザアカイ、今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。……人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」（ルカ19・5、10）

東京と福岡の大神学校が合同され、私は6年のうちの最初の5年を福岡で過ごしました。神学校では進級や選任、叙階のため、毎年審査があります。

年に数回、個別に院長室に呼ばれ、養成者会議の結果を伝達されます。耳が痛いもので、私の場合、性格のある部分について、「もっと変わりなさい」と言われていました。でもなかなか変われず、5人くらいの神父様方から毎年同じ指摘を受けました。

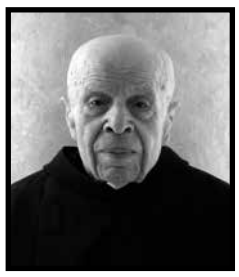
助祭叙階前、福岡キャンパスでの最後の晩、ある神父様の部屋に呼ばれました。神父様は「中野さん、変わらないで」と話し始めました。「その中野さんを通して救われる人がいるんだよ。だからお願い。変わらないで」と。泣きそうになるのを必死でこらえながら聞きました。「変わりなさい。」「変わらないで。」どちらも愛情のこもった言葉だったと思いますが、これは私にとって、忘れられない大きな出来事となりました。

ザアカイという徴税人がいました。ローマの手先となり、同胞から必要以上に取り立てる嫌われ者。罪人の頭と蔑まれ、お金持ちでも心は孤独な彼を、イエスさまはわざわざ訪ねます。どれほどの喜びだったでしょう。イエスさまは彼に、今の仕事を辞めるようにとは一言も言いません。しかし彼は罪を認め、内側からすっかり変えられました。本当の愛の力というのでしょうか。

「進藤龍也（たつや）」という、40代の牧師さんがいます。『人は必ずやり直せる』『立ち上がる力』という講演集がありますが、この方は前科7犯の元やくざです。組織のナンバー2から薬物中毒になり、転落の人生。しかし、東京拘置所の独房で読んだ「立ち帰れ」「生きよ」というエゼキエル書（33章11節）の言葉に「ああ、神さまはいる」と思い、あまりのうれしさに「やったー、やったー」と叫んだそうです。彼は言います。「少年院では、走って、腹筋して、穴を掘って、でもそんなことで性格は変わりません。人は良くならない。人は愛でしか変わらないんだと、僕は言いたい」と。

新しい年を迎えました。見えなくても、私を深く愛してくださっている方がいる。そのことを信じて、新しい出発を始めてみようではありませんか。

ローマン・クエチェン修道士
（コンベンツアル聖フランシスコ修道会）



11月24日午後5時20分、肺炎のため諫早市高来町の養護老人ホーム聖フランシスコ園で逝去。100歳。

1914年5月22日ポーランド生まれ。32年5月8日初誓願、34年8月10日来日、35年6月25日聖母の騎士修道院で終生誓願。49年兵庫・仁川修道院、61年姫路、63年東京・王子修道院、64年東京・東村山修道院。74年日本管区へ移籍。76年東村山修道院、91年小長井・みさかえ分院、97年小長井修道院。2009年10月、聖フランシスコ園に入所。

聖像制作や建築・造園技術などの能力を活かし、修道院を整えた。1949年に行われた聖フランシスコ・ザビエル渡来400年祭では、原爆で破壊された浦上天主堂の広場に祭壇などを飾り付けた。

葬儀ミサ・告別式は11月27日、同修道会日本管区長の﨑濵宏美師司式により、本河内教会で行われた。

モニカ 大石セイ修道女
（純心聖母会）

11月14日、聖フランシスコ病院で逝去。90歳。

1924年、平戸市生まれ。42年に同会へ入会。44年初誓願、53年終生誓願宣立。初誓願宣立後は、浦上修道院をはじめ、伊王島、佐世保、神崎、潜竜、深堀修道院に派遣され、幼児教育や教会奉仕などに携わった。

70年、本会で社会福祉の事業所が開設されると、恵の丘修道院、ときわ荘修道院に派遣され、施設の責任者として利用者の世話、施設運営や職員の養成などを通して基礎を築いた。特に最後の奉仕の場となった小野田老人ホーム（山口県）では、施設内だけでなく地域や小教区の方々とも広く関わりを持ち、多くの人に慕われた。

控えめな中にも芯のある明るさとやさしさでいつも温かく周りの人に接し、出会う人に神の愛を伝え、み言葉の種を蒔き続けた。2005年からロザリオの聖母修道院で療養。70年間の誓願生活であった。

葬儀ミサ・告別式は、11月16日、修道会本部聖堂で行われた。

ガブリエラ 山野シヅエ修道女
（純心聖母会）

12月4日、長崎市三ツ山町のロザリオの聖母修道院で逝去。81歳。

1933年、平戸市生まれ。52年に同会へ入会。56年初誓願、65年終生誓願宣立。初誓願宣立後は、浦上修道院をはじめ、伊王島、広島、神崎、鹿児島、八王子修道院などに派遣され、調理や教会奉仕に携わった。

手先が器用で研究熱心な、常に本物を目指す人であった。飾らない人柄で、得意の料理やお菓子作り、生け花などを通して「おもてなしの心」を表現した。

数年前から体調を崩し入退院を繰り返していた。2011年からロザリオの聖母修道院で介護を受けながら療養生活を送っていた。58年間の誓願生活であった。

葬儀ミサ・告別式は、12月5日、修道会本部聖堂で行われた。

精道三川台小学校（男子校）
〒852-8121 長崎市三川町1234-1 tel & fax.095-845-6846 HP：http://www.seido.ed.jp/c1501
1月24日(土) 第2回入学審査〔出願期間1/13(火)～1/22(木)〕
1月31日(土) 10：00～ 学校説明会・オープンスクール
2月 1日(日) 10：00～ 学校説明会・英語体験授業
2月14日(土) 第3回入学審査〔出願期間2/5(木)～2/12(木)〕

ご先祖に心より感謝を・・・
材石治明
長崎本店　長崎市城栄町13-1　電話（095）846-3598
大村店　大村市民霊園内　電話（0957）50-3008

ハマチ・タイ養殖、アジ・イワシ加工、中型旋網
エテルナ・ワコー(株)
代表取締役 ミカエル 溝口美義
〒858-0926 佐世保市大潟町586
TEL(0956)47-4380

(医) 外尾内科医院
院長 ペトロ 外尾明利
〒857-1152 佐世保市黒髪町34-4
TEL0956-33-5557

白蟻調査無料・駆除予防工事5ケ年保証付
白蟻防除施工士
大田白蟻研究所
代表者 マリア 大島睦子
（〒850-0811）長崎市矢の平1丁目14番15号
☎長崎 095-822-8436（ハヨイロ）
FAX 095-822-8488